

こちら
子どもスポーツ診療室



サッカーやバスケットボールなど、前後左右への動きが激しいスポーツは関節を痛めやすい。しかし、膝や肘などの痛み、腫れが6週間以上続いた場合は「若年性特発性関節炎」の可能性がある。発症はまれだが、症状が重いと骨の変形を招くケースがあるため、十分な注意が必要だ。徳島大学大学院運動機能外科学の浜田大輔講師に、症状や治療法などについて聞いた。



浜田大輔講師

若年性特発性関節炎は16歳未満で発症。少なくとも6週間以上持続する原因不明の慢性関節炎で、以前は「若年性関節リウマチ」とも呼ばれていた。日本での有病率は小児10万人当たり10〜15人と推測されている。

七つの病型に分類され、全身症状が現れる「全身型」のほか、関節に症状が出る「少関節炎」と「多関節炎」が、日本で多いとされる。関節炎のうち、発症から6カ月以内に症状が出ている関節が4カ所以下だと少関節炎、5カ所以上あれば多関節炎という。全身型は、2週間以上続く発熱や関節炎のほか、紅斑(皮膚の表面が赤く盛り上がる)やリンパ節の腫れ、心臓を覆う心膜に炎症が起る心膜炎、肝臓や脾臓の腫れなどの症状が出る。浜田講師は「全身型は、多臓器不全などを引き起こす『マクロファージ活性化症候群』など重篤な合併症を発症すると命にも関わる。早期の治療が重要です」と訴える。

少関節炎・多関節炎は、主に膝や足首、肘、手首などに痛みや

骨の変形招くケースも

腫れが現れ、炎症を放置すると関節に変形を来すこともある。発症部位は人によって違いますが、起床時に指のこわばりを訴えるケースがあるほか、足関節の症状が悪化して痛みがひどいと歩くのも難しく、目の炎症を併発することもあるので要注意だ。少関節炎の場合には下肢の関節に比較的多く、多関節炎では左右対称に大関節・小関節全体に見られる。自己免疫疾患と考えられているが、詳細な原因は不明で予防するのは難しい。治療は、痛みや骨が壊れるのを抑える薬物療法が基本。炎症を早期に鎮静化し、機能障害を最小限にすることが目標になる。主に大人がかかると異なる「関節リウマチ」とも違い、治療中を含め、関節に負担のかかる運動や作業を控えるとともに、関節の可動域や筋力を保つという。目や筋力を保つという点も大事になる。

浜田講師は「発症原因は詳しく分かっていないが、早期の診断、治療によって良くなるケースが多い。関節の腫れや痛みが長期にわたって続いていたら、早めに病院を受診してほしい」と呼び掛けている。

(萬木竜一郎)

若年性特発性関節炎

病型	症状の出る部分	主な症状
全身型	全身	1カ所以上の関節炎と2週間以上続く発熱、紅斑が主症状。全身のリンパ節や肝臓、脾臓の腫れ、心膜炎などを伴う。
少関節炎	発症6カ月以内の炎症関節が4関節以下	主症状は6週間以上続く関節炎。関節に腫れや圧痛、熱感などの症状が出る。起床時のこわばりがあることも。目の炎症を併発するケースもある。
多関節炎	発症6カ月以内の炎症関節が5関節以上	

若年性特発性関節炎